

立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之  
立命館大学理工学部 学生員 O寺口 和生

## 1: はじめに

近年ユニバーサルデザインという言葉が注目されている。障害者をいかに保護しようかという視点から、障害者の積極的な社会参加を支援する視点へと転換している。

しかし、現在の日本ではバリアフリーがまだまだ主流であり、ユニバーサルデザインという概念はまだ新しく、研究はあまりされていない。そこで超高齢化社会を目前とした我が国では、ユニバーサルデザインの早急な導入が必要とされる。同時にユニバーサルデザインの本質を理解し活用することのできる技術者の育成も必要である。

そこで、本研究では、ユニバーサルデザインの理念を明確にするとともに、現時点でユニバーサルデザインの先駆的事例とされる「公園緑地のユニバーサルデザイン」を調査・検証し、それらを教材として利用できるように CD-ROM コンテンツを作成する。

## 2: 調査内容

### (1) 対象地

大阪府が管理する「りんくう公園」がユニバーサルデザインの配慮されている代表例とされているので、同じ大阪府が管理する「服部緑地」を比較対照とし、両者を対象地にした。

### (2) 既存公園の利用者のヒアリング結果

当研究において公園をデザインするためのヒアリング調査を実施した。その結果の一部を示す。

・公園の入り口はバイク対策なのか、あまりにもはいりづらく、また、入り口の個数も少ない。＜車椅子利用者＞

・誘導用ブロックはつまずくことがある。ブロックがなくても舗装材の変化で気がつく。＜視覚障害者＞

・多くの人たちは障害者と交流を持つことに対して、否定的なイメージを持っているので障害者用のコーナーをあまり利用しない。＜障害者の介護者＞

・公園においてまず問題になるのは「アクセス」の確

保である。＜障害者の介護者＞

・駐車場の有無、イベントなど公園に関する情報が欲しい。＜健常者＞

・トイレが汚い、公園にゴミや動物の糞などが散乱して汚い。＜健常者＞

### (3) 公園利用者の要望に対する管理者の対策

公園管理者のユニバーサルデザインの導入に対する対策内容は、誰でも見所を一周できるルートを整備し、そのルート周辺を中心に誰にでも使いやすいトイレの整備するというものと、各公園の主要施設の改善などの設備重視にとどまっている。

しかし、実際の利用者は、設備面もさる事ながら、衛生面・アクセス面に関する不満が多いようである。また、設備に関するものでも、椅子に背もたれや手すりの設置要望、誘導ブロックの適正な整備（視覚障害者）など、より細かい配慮をのぞんでいるということがわかる。

これは、公園管理者側に対して利用者が期待することが伝わっていないことを意味する。

ゆえに管理者側の改善対策の練り直しによって、利用しやすい緑地公園の整備が可能なのはである。

## 3: CD-ROM コンテンツ

### (1) コンセプト

現在、わが国ではユニバーサルデザインに関する研究は欧米に比べても遅れている。

そのため、あらゆる施設はもとより公園緑地のユニバーサルデザインの導入も遅れている。新規に整備される公園緑地に関しては、配慮がなされているが、既存の公園の改善はまだ不十分であり、ユニバーサルデザインというよりはバリアフリーという段階である。

人々の中にユニバーサルデザインという考え方自体が浸透していないのと

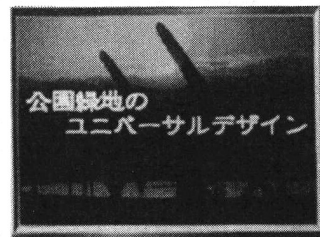


図1. CD-ROM タイトル画面

同時に、それをつたえるための情報もほとんど確立されていない。

そこで、本研究成果を CD-ROM という普及率が高く容易に利用できる再生装置を利用することで情報の利用の公開を計ると同時に今後の社会において必要不可欠になっていくであろうユニバーサルデザインという概念を認識するための手段の一つとして提案したい。

## (2) 操作・構成

本 CD-ROM の操作に関しては、単純な操作で次へ進めることと、画面を見ただけでどうすればどのような動作をするのかが分かるように配慮している。

以下の図に CD-ROM コンテンツの構成を示す。

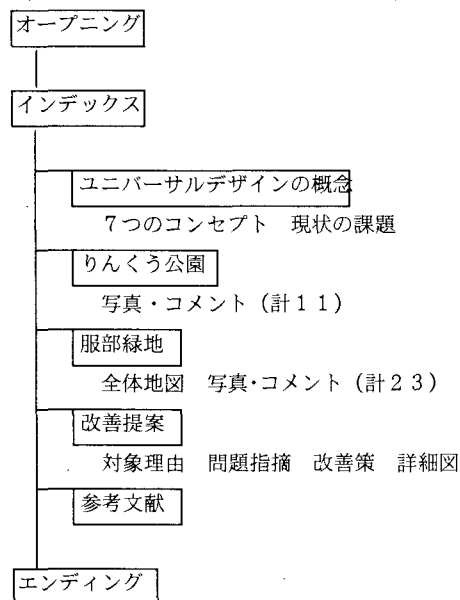


図2. CD-ROM コンテンツ構成図

当コンテンツの構造は、深い階層を作ることによる見落としを避ける為、階層を浅く作成した。

## (3) 提案

改善提案ではアクセシビリティの高上に焦点を置き、現状の電車・自家用車で改善する為、バスでのア

について提案した。  
バス停は低床式バスの導入を前提として、道路部分を歩道部から30cm程の位置まで掘り下げること、バス・道路間をフラットに保つことを考えた。

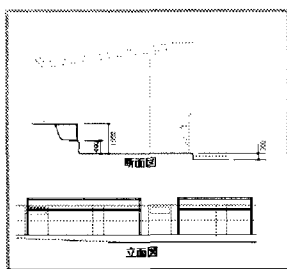


図3. 改善提案図

バスの経路路線については緑地外周上の入り口付近

に数箇所設け、付近にある各鉄道の駅や、北部の千里ニュータウンなどを結ぶ事で、より便利になると思われる。

また、休憩所の一部の機能としてバス停をつくることで利用効率が上がるのではないだろうか。

本研究では、この他にベンチの構造・障害物などの危険情報の告知方法などの提案も行った。

## 4: 考察

本研究では、大規模な都市公園緑地におけるユニバーサルデザインの現状を調査したが、ハード面に比べソフト面の整備が遅れているように思われる。

りんくう公園は設定誘致到達時間1時間、特に関西国際空港利用者の公園への誘致を目的とした風致公園として設計されているが、空港の利用者は即座に鉄道や自動車を利用し目的地へと移動する傾向にあるため、りんくう公園の利用はあまりしないようである。

また、りんくう公園はユニバーサルデザインの公園の代表例としても挙げられるように、利用性は極めてアクセプタブル（利用可能）レベルであり、このことは従来の高齢者や障害者などにとって利用性がディフィカルト（利用困難）レベルであった公園緑地に比べて飛躍的な進歩である。

しかし、りんくう公園は「日本の玄関口」としての特徴を重視しすぎた為、一番利用するはずである地域住民の利用は考慮されていない。ゆえにりんくう公園はユニバーサルデザインのハード面のみ重視してバリアフリーとなんら変わらないのではないだろうか。

ユニバーサルデザインの特徴でもある社会へのアクセシビリティの確保というソフト面での改善が必要とされる。

一方、総合公園である服部緑地はまずはハード面からの改善を早急に行う必要がある。

### 参考文献

- ・金子郁容 著「ボランティア」(1997)岩波新書
- ・赤池学・北川泰三 著「地域開発」'97. 12(1997)日本地域開発センター
- ・(社)日本造園学会 著「緑空間のユニバーサル・デザイン」(1998)学芸出版社
- ・小川信子・野村みどり・阿部祥子・川内美彦 著「先端のバリアフリー環境」(1997)中央法規出版株式会社
- ・岡本民夫・高橋敏士・森本佳樹・生田正幸 著「福祉情報化入門」(1997)(株)有斐閣
- ・光野有次 著「バリアフリーをつくる」(1998)岩波新書